

『明晰』&『冷静』&『知的』&『人間力』 ～ 臨機応変に活用 ～

2025 年 1 月 10 日『がんゲノム医療時代における Lynch 症候群研究会』（Web 臨時幹事会）に出席した。筆者は『リンチ症候群研究会』の代表も仰せつかっている。広辞苑によれば、【国手とは『国を医する名手の意』、名医また医師の敬称とあり、『医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思ふべし』】とのことである。今回、医師の地上的使命と同時に『日本の傷を医す者』（矢内原忠雄 1893-1961:1945 年 12 月 23 日の講演）が鮮明に蘇ってきた。

『がん哲学』とは、『がん細胞から人間社会の病理をみる』である。『がん哲学外来』の視点は、『Origin of fire』の如く『医療の隙間を埋める』試みとして全国に広がることが期待される。

- (1) 『明晰な病理学的診断』
- (2) 『冷静な外科的処置』
- (3) 『知的な内科的診療』
- (4) 『人間力のある神経内科的ケア』
- (5) 『人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学』

筆者は『日本国のあるべき姿』として『日本肝臓論』を展開する。【人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な『いたわり』の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。昔って新渡戸稲造(1862-1933)は国際連盟事務次長時代(1920-1926)に、『知的協力委員会』を構成し知的対話を行った。そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表するアルベルト・アインシュタイン(1879-1955)、キュリー夫人(1867-1934)もいたことは特記すべきことである。】今こそ国際貢献として『21 世紀の知的協力委員会』の再興の時ではなかろうか！。

『目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし』（新渡戸稲造）、『古いものには、まだ再活用される要素があるのである』（内村鑑三 1861-1930）の教訓が今に生きる(画像)。



上 内村鑑三先生
下 新渡戸稲造先生